

クラゲに救われた水族館

鶴岡市立加茂水族館 館長 奥泉 和也 (Okuizumi, Kazuya)

クラゲ水族館誕生前夜

1929年に鶴岡駅から湯の浜温泉駅まで鉄路が全線開通し、南西4kmに位置する加茂地区の観光振興のために地元の有志が「山形県水族館」を建設しました。開館当時のパンフレットには水族館のマークとしてクラゲが登場し不思議でしたが、初代館長が温泉旅館の館長と聞けば納得です。温泉のマークをひっくり返しただけのことでした。戦中の1944年に日本海軍に徴用され訓練所として、戦後は県立水産高校の校舎として使用され、この間は水族館として機能していません。のちに鶴岡市に返還され鶴岡市立加茂水族館と名称を変更し再開館を果たしました。

その後、1964年に新築移転しました(図1)。全て底面ろ過方式、大型水槽(たったの30t)は一枚ガラスではなく小型ガラスを多数使用するなどして徹底的に建築費を抑えたそうです。それでも毎年20万人以上の入館者がありました。1967年、市は第三セクターを立ち上げ観光開発に乗り出します。そこに水族館を売却して庄内浜加茂水族館に名称を変更しました。付属施設が赤字続きで1971年に公社は倒産してしまいます。翌年、商事会社に経営が代わり再開館しますが、メインはサル山、アニメで流行ればアライグマと相変わらずの迷走ぶり。アシカショー、ラッコ展示と頑張りましたが入館者は減る一方です。仕事が増えても4名の飼育係に増員はなし。当時、飼育員だった私の志望動機「もしかしたら仕事で釣りができるのでは？」という野望は粉々に打ち砕かれ、ただ鬱々とした時間だけが過ぎていきます。

クラゲ水族館誕生

年間入館者数10万人を割り込み閉館の危機がささやかれ始めた1997年に転機が訪れます。特別展のサンゴ水槽に4mmほどの生物が30個体ほど泳いでいました。私は網ですくい取りケースに入れ飼育を始めることにしました。当時の館長や先輩も何の生物か分からないので知り合いの飼育係に電話をしました。「それはサカサクラゲだよ。サンゴの骨格にポリプが付着していてクラゲを出したのだよ。」と教えてくれました。無性生殖で増殖するのが面白くて夢中になって取り組みました。泳がないので地味なクラゲですが展示したところ見学者は大喜び。クラゲ展示の始まり始まりです。

もっと喜ばせようとクラゲを採集して展示することにしました。しかし、クラゲ専用の水槽が買えなかったので長くても一週間の展示でした。そこで、死ぬ要因を記録し水槽の改造を始めました。3年後、オリジナルのクラゲ水槽が完成します。一般的な水槽作製技術でも作れるので従来品の90%のコストカットに成功しました。多くの人が使えるように特許取得は見送りました。現在、その水槽は海外の水族館でも使われています。

1999年夏、前海でビゼンクラゲ(当時はスナイロクラゲと呼ばれていた)が大量発生し展示を行いました。翌朝、照明を点灯約一時間後、水槽が白濁し始めそれが毎朝続きました。山形大学農学部後藤三千代研究室の実体顕微鏡で観察したところ受精卵であることが判明しました。キラキラと輝きを放ち宝石のようでした。そのままひと夏研究室で成長の記録を取りました。

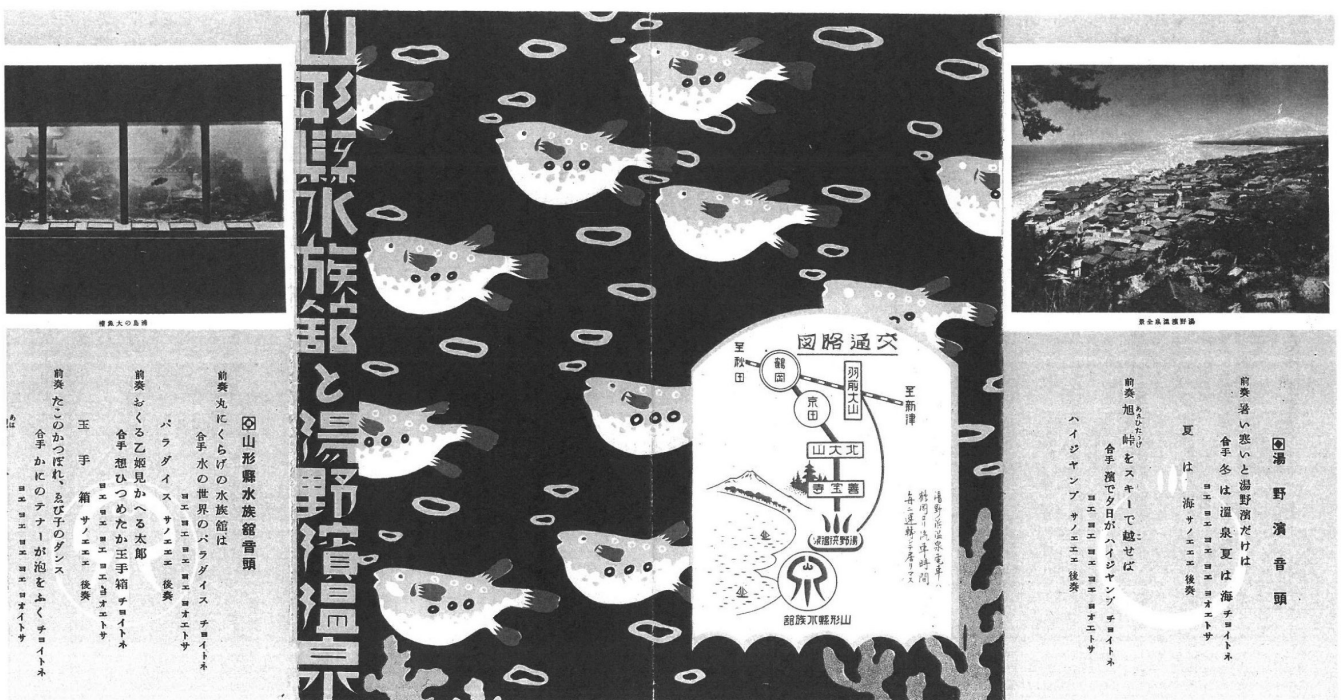


図1 山形県水族館



図2 加茂水族館外観



図3 水槽

しかし、私はどのように記録をまとめて良いかわかりません。「先生が必要」と考えた私は伝説的な業績を残す柿沼好子博士に電話をして「先生になってください」とお願いしたところ快く引き受けてくれました。

クラゲの展示はビーカーなど小型の水槽でも行えるため、貧乏な加茂水族館はうってつけです。2000年には12種で日本一、2005年には20種で世界一の展示種類数を始めました。下村修先生（のちに名誉館長）がノーベル賞を受賞した年はオワンクラ

ゲフィーバーで多くのお客様が訪れました。展示を始めて15年、クラゲの魅力だけで年間27万人、実に3倍の入館者が訪れる施設になりました。

2014年のリニューアル後は50種類以上展示を目指し2025年現在80種以上の展示を行っております。2026年、いままで習得した技術を存分に発揮するために研究棟を建築中です。次世代のクラゲ展示に期待してください。

→【次ページ：関連記事「クラゲ繁殖と今後の展望」】